

郷土民謡誕生前後

大竹市が誕生してから作られた曲の第1号が、『あゝ征長隊』と、今でも盆踊りなどでおなじみの『大竹音頭』である。

『あゝ征長隊』と『大竹音頭』は大竹市が、郷土出身の作詞家である石本美由起に依頼して作った郷土民謡である。石本は、昭和23(1948)年に『憧れのハワイ航路』が爆発的なヒット曲となると、2年後の昭和25(1950)年に上京、コロムビアレコードの専属となっていた。

その制作秘話は、昭和31(1956)年の暮れごろ、当時市議会副議長だった長谷川行雄が上京し、旧知の石本に会い、『大竹音頭』と『大竹小唄』の2曲の制作について語り合ったことから始まる。長谷川は、スタートしたばかりの大竹市にとって、観光や商工部門の観点からも、『大竹小唄』なる曲をぜひとも作りたいと、密かに熱く願っていた一人であった。他市の市勢要覧や観光宣伝を見ても、小唄のないところはほとんどない。市制施行祝賀会の折にも「市の唄を作ったらどうか」という話が出たが、まだ実現していなかった。とはいえ、長谷川と石本が会ったこの段階は、市が正式に曲の制作を決定する前のことであり、長谷川は、まず石本の意向を確認する

が付け加えられていた。さっそく市議会産業委員会では協議が行われ、「立派な歌詞を一層引き立てて活かすと云うのであれば、ぜひとも霧島昇にしてみたい。」と強く要望した議員もいたが、島倉千代子との交渉過程や、トップ歌手「島倉千代子」の立場などを推察、「歌手を替えるという事はそう簡単にできるものではない！」などの意見もあり、長時間審議した結果、既定方針通り島倉千代子に吹き込んでもらうことに決定した。

一方、『大竹音頭』については、石本が作成した歌詞は16番までであったが、レコーディング可能なのは5番までのため、歌詞を5つ選定し、レコード化された。レコーディングは予定通り、『あゝ征長隊』を島倉千代子、『大竹音頭』を花村菊江・山形英夫で行われ、9月1日にはレコード300枚が大竹市に発送された。

お披露目公演、島倉千代子

9月になると、市は『あゝ征長隊』と『大竹音頭』の踊りを、各地区の婦人会(現自治会女性部)、青年団、小・中学校、保育園などの代表者に普及・指導してもらうため、大竹市内在住の花柳小豊と天野令光の2名に依頼した。この普及活動によって、市内全域に盆踊りとして『大竹音頭』の踊りが定着していった。

ために上京したのである。石本は、故郷からの思わぬ依頼に大変喜び、良い曲を作りたいと願った。

市に残されている簿冊に、石本から長谷川宛てた昭和32(1957)年1月13日付けの手紙が残っている。この中で石本は『大竹音頭』の進行ぶりを尋ね、良いものを作りたいたら至急一報願います。できれば夏の盆踊り迄にレコード発売出来るようにしたらと愚考しています。」と記している。

昭和32(1957)年5月、合併後の財政が厳しい中、市は市議会へ『大竹小唄』制作の議案を提案した。市議会では『大竹小唄』の制作に異議なく、市議会産業委員会を主体として研究を進めることが了承された。歌手は『大竹小唄』を当時の人気歌手青木光一と花村菊江が、『大

市制施行70周年連載企画

振り返る70年

問い合わせ
企画財政課 ☎59-2124

第4回『あゝ征長隊』と『大竹音頭』はこうして作られた!

トップスターによる『あゝ征長隊』。広く市民に親しまれてきた『大竹音頭』。その誕生は67年前にさかのぼります。



(右) 養和会館で行われた発表会。右端の日本髪の振り袖姿が島倉千代子(左上)当初発売された25cm78回転のSP盤(左下)再発売された17cm45回転のDーナツ盤。

【注釈】※1『大竹小唄』: 大竹町が制定した曲。作詞は山本康夫、石本清四郎、石本美由起、新上一武の4人であった。作曲は山本寿である。※2島倉千代子: 「島倉千代子は、三橋美智也とならんで、レコード界の二大新星であるという。ファンレターが日に平均400通。華やかなトップスターだが、まだ19歳である。高校生の時にコロムビアの第五回全国歌手コンクールで優勝『この世の花』をキッカケにとんとん拍子に人気と地位を築き上げた。」昭和32(1957)年11月12日付け中国新聞記事より※3霧島昇: 戦前から戦後にかけて活躍した流行歌手。代表曲に「愛染かつら」「旅の夜風」(ミス・コロムビアと)「誰か故郷を思わざる」「リンゴの唄」(並木路子と)などがある。

余談になるが、石本が郷土のために、コロムビアと交渉していたことが分かる次のような手紙が残っている。「:会社として3回出演は困ると大変反対しましたが、とうとう3回に押し切りました。次に出演料ですが、上原先生のも入れて、22万に話が決まりました。現在、島倉一行が興行師を通じてやる場合、一日2回出演で35万だそうです。それで、会

社としては25万と言ってきたのですが、いろいろと頼み込んで、上原先生のも入れ22万ということに、今日決定しました。:とあり、石本が強引に頼み込んだ様子が、目に浮かぶ。石本は、財政難の中で郷土大竹市が自分を頼ってくれたことに深く感じ入り、会社に頼み込んだのである。彼が郷土を思う気持ちは、後に「大

竹音頭』を新進売り出し中のトップスター島倉千代子(当時19歳)と山形英夫が吹き込む計画で、いずれの曲も、作詞は石本美由起、作曲は上原げんとであった。続いて6月の市議会全員協議会に『大竹小唄』『大竹音頭』制作および発表会開催の予算案が提案され、「市財政逼迫の折、財源をどうするのか」などの意見が出たが、「税金の投入を50%にして残りを、入場料や寄付金、レコード売上金で賄う」ということで制作を決定した。予算総額は103万6千円だった。

から制作の依頼のあった『大竹小唄』を、まったく曲想の異なる『あゝ征長隊』とする構想を固めていて、島倉千代子の歌声がその曲想に合うと決めていたのだろう。社内会議で、彼はその構想を熱く語り、当時他の自治体で多く作られていた、従来からある民謡調ではなく、流行歌に近い『あゝ征長隊』の企画になったと思われる。実は、『大竹小唄』※1は戦後の大竹町時代に既に作られており、この作詞に石本自身もかわっていた。推測だが市から依頼のあった『大竹小唄』は既に存在していることも、『あゝ征長隊』という曲にした理由の一つであろう。

石本は、7月18日には2曲の作詞を終え、原稿を市へ送付している。『大竹小唄』は『あゝ征長隊』というタイトルで、幕府軍と長州軍が戦った「長州戦争」のことが描かれていた。幕府による「長州戦争」で大竹市は芸州口の戦場となった歴史がある。この曲は、市側の希望を入れ、全国発売を視野に入れた歌詞となっており、レコード吹き込み(レコーディング)は7月27日に予定されていた。

『大竹小唄』から『あゝ征長隊』に市は7月、日本コロムビア株式会社より、レコード300枚の製作費について正式な見積書を受けとった。見積書には、A面『大竹小唄』島倉千代子、B面『大竹音頭』花村菊江、山形英夫となっていた。当初考えられていた青木光一と花村菊江で歌う『大竹小唄』ではなく、島倉千代子のみが歌う『大竹小唄』に変更されていたのである。おそらく、石本は5月末から6月にかけて、市

ただ、その原稿には、コロムビア側からの『あゝ征長隊』は男性歌手が歌った方が似合う歌詞なので、島倉千代子※2よりも霧島昇※3の方がいいのではないか」という一文

竹というふるさとがなかったら、作家石本美由起は、この世に存在しなかった。大竹は翼休めに帰ると、人の情けに泣くところ」と語っているが、この当時も相当のものであった。(石本は生前作詞家ではなく作詩家と称していた)

発表会は、11月4日、第1回目が正午から、第2回目が午後3時からそして第3回目が午後6時から、三菱レイヨン大竹工場養和会館において行われた。入場券は10月8日から、1枚150円で販売を開始、2441枚を売り切っている。また、レコード売り上げは1枚350円で288枚の売り上げだった。こうして発表会は大盛況の内に終了したのである。

その後『あゝ征長隊』は昭和33(1958)年8月15日から、コロムビアより全国発売され、当時の芸能雑誌『平凡』と『明星』に掲載された。石本は、2つの芸能雑誌に大きく取り上げられたうれしさからか、このことを早速郷土に知らせた。

当時の資料から、市も石本も『あゝ征長隊』を主力の郷土民謡として制作したと思われるが、制作されて7年が経過した今、多くの市民に親しまれている曲は『大竹音頭』であり、『あゝ征長隊』を知らない市民が多いことを石本はどう思っているだろうか。